

の機能障害により、乳児期より様々な感染症に罹患する遺伝性疾患であるが、本例のような腹膜炎を呈することはきわめて稀である。

16) きわめて稀と考えられる結腸間膜原発 neurofibromatosis の1例

小幡 和也・山際 岩雄
大内 孝幸・鷲尾 正彦 (山形大学第二外科)

腹部腫瘍を主訴に来院した von Recklinghausen 病を伴わない1例を経験した。腫瘍は弾性硬の小腫瘍の集族であり回盲部より脾湾曲までの結腸間膜にあり拡大右半結腸切除を行い全切除した。症例を報告し考察を述べた。

17) 上腸間膜動脈閉塞症 6 例の検討

富山 武美・小野 一之
小山 諭 (佐渡総合病院外科)
酒井 達也 (同 内科)
大川 彰 (巻町国民健康保険
病院外科)
植木 匡 (新潟大学第一外科)

平成5年の1年間に佐渡総合病院外科においての手術症例は465例、うち全麻263例であった。その中で3例の上腸間膜動脈閉塞症を経験した。最初の1例は第13病日に死亡し、2例は外科を軽快退院した。この死亡症例をいかに治療をすべきであったかを反省、検討するために、今回過去10年間に佐渡総合病院外科で手術的治療を行った6例の上腸間膜動脈閉塞症の術前術後の臨床経過を検討した。あわせて最近経験した上腸間膜動脈閉塞症の非手術的治療症例のCT像と血管造影像に興味ある知見を得たので報告する。

18) 全胃温存脾切除術における脾胃吻合症例の検討

杉本不二雄・高木健太郎
山本 智・長谷川正樹 (新潟県立中央病院)
真部 一彦・小山 高宣 外科
植木 淳一・畠山 重秋
阿部 惇 (同 内科)
関谷 政雄 (同 病理検査科)

1993年6月から1994年2月の9ヶ月間に脾胃吻合法を7例に施行した。症例の内訳は、下部胆管癌、膵頭部癌に対する PPPD が2例、肝門部胆管癌に対する肝左

葉切除+PPPD が1例、腫瘍形成性慢性膵炎に対する PPPD が1例、膵体部の Cystadenoma に対する分節脾切除術が1例、そして、膵頭部の Solid and cystic tumor 及び腫瘍形成性慢性膵炎が各々1例ずつであった。吻合法は、膵と胃体部後壁の嵌入法による1層縫合で、縫合糸は PDS (4-0) を用いた。膵管チューブは4例は胃内の lost tube とし、他の3例は体外へ誘導した。7例中6例には術後合併症を認めず、良好に経過した。しかし、HPD 症例1例に縫合不全を生じ、30日間の洗浄にて自然閉鎖した。経口摂取状態は、術後約1ヶ月間の Gastric stasis の期間を経過後は良好で、退院後の栄養状態にも問題を認めなかった。全胃温存脾切除術における脾胃吻合法は、その簡便性、安全性及び長期的な Quality of life において有用な術式であると考えられた。

19) 膵管胆道合流異常を合併した膵頭部癌の1切除例

田沢 賢一・佐藤錬一郎
鹿嶋 雄治・鈴木 聡 (秋田組合総合病院)
宗岡 克樹 外科
山崎 俊幸 (新潟大学第一外科)

膵管胆道合流異常を合併した膵頭部癌の1切除例を経験したので報告する。症例は48歳の女性で、黄疸と発熱で他院より紹介、精査にて膵管胆道合流異常を合併した膵頭部癌と診断した。平成6年3月10日、門脈合併切除をともなり膵頭十二指腸切除術を施行した。

膵管胆道合流異常症は胆道癌発生の危険因子であるが膵臓癌の合併はまれであり、文献的考察を加え報告する。

20) 当院における大腸内視鏡治療の現況

山本 克弥・斎藤 寿一
松村奈緒美・岡本 政広
南村 哲司・三浦二三夫 (齊藤胃腸病院外科)
工藤 進英 (秋田赤十字病院)
外科

当院において平成2年10月から平成6年3月までの3年6カ月間に施行された大腸内視鏡検査総数は2,679人、そのうち786人に内視鏡治療を施行した。検体総数は1,120個のうち癌は72個6.4%であった。

現在当院では、内視鏡治療後の組織検査で sm 癌で脈管侵襲があるか、または切除断端が陽性の場合 R1 一部2群のリンパ節郭清を含む手術を追加している。これまでに13例手術適応と考え手術を施行した。1例は Rb

の断端陽性例で QOL を考え粘膜切除としたが残り12例は開腹手術を施行した。そのうち2例にリンパ節転移を認めた。1例は 21×18 mm lp 型ポリープで2群のリンパ節にも転移を認めた。2例目は 11×9 mm の ls 型ポリープであった。

ビデオセッション

V1) 高度な虫垂炎に対する腹腔鏡下虫垂切除術の有用性とその手術手技

若井 俊文・三浦 宏二
金田 聡・牛山 信 (秋田赤十字病院)
高野 征雄 (外科)

我々は前回の集談会において、腹腔鏡下虫垂切除術(LA)は、術中洗浄が十分に行える、創感染がない、また従来の開腹下虫垂切除術(OA)における術後創感染(+)群と比較して、入院日数および総医療費で優っていることから、高度な虫垂炎ほどその良い適応であることを報告した。現在までに、5例の高度虫垂炎に対してLAを行ってきたが、今回、壊疽性虫垂炎の2例と、汎発性腹膜炎を併発しながら術後良好な経過をたどり、6日目に退院し得た穿孔性虫垂炎の1例の手術手技をビデオで供覧する。

V2) 腸閉塞に対する腹腔鏡手術

中村 茂樹 (栃尾郷病院(現燕)
労災病院) 外科
鈴木 力 (新潟大学第一外科)

腹腔鏡を応用した腸閉塞解除術を6例経験した。6例の背景は胆嚢摘出後2例、胃垂全摘後2例、虫垂切除後1例、汎腹膜炎後の多発性小腸閉塞1例で、手術適応は保存療法無効3例、腸閉塞の繰り返し2例、絞扼性腸閉塞1例だった。解除術が完全に腹腔鏡下で行われたもの2例、小開腹を追加したもの3例、視野不良のため大開腹に移行したもの1例だった。手術時間は1~3時間だった。創痛は軽微で合併症は無かったが、多発性腸閉塞の1例は再び腸閉塞になり再手術をした。以上より、腸閉塞に対する腹腔鏡(補助)下の解除術は、低侵襲の根治手術になり得ると思われた。

V3) 小児外科領域における腹腔鏡下手術の有用性

金田 聡・三浦 宏二
牛山 信・若井 俊文 (秋田赤十字病院)
高野 征雄 (外科)

3例の小児に腹腔鏡下手術を行い良好な結果を得たので手技を供覧する。(症例1)9歳男児、急性虫垂炎。腹腔鏡下に Endo-GIA30 にて虫垂を切除した。手術時間は30分、入院は3日であった。(症例2)8歳女児、熱傷後の急性無石性胆嚢炎に対し腹腔鏡下胆嚢摘出術施行。高度な胆嚢炎のため手術時間は3時間を要した。(症例3)11歳女児、遺伝性球状赤血球症にともなう脾腫と胆嚢結石に対し腹腔鏡下脾臓切除と胆嚢切除を行い、腫大した脾臓は5cmの小切開より体外に摘出した。手術時間は5時間25分、入院期間は5日であった。3例とも術後合併症は認めず、創痕も目立たない。腹腔鏡下手術による、入院期間の短縮、創痛の軽減、小さな創痕、術後イレウス予防などの効果は小児例ほど重要と考えられた。

V4) 腹腔鏡下超音波検査法の実際

大谷 哲也・川合 千尋
川上 一岳・中平 啓子 (日本歯科大学新潟)
吉田 奎介 (歯学部外科)

当科では、腹腔鏡下胆嚢摘出術(LC)における術中精査法として現在までに50例の術中超音波検査を行ってきた。術中超音波検査は、胆道造影に比し胆道系・脈管系の screening 法のみならず胆嚢隆起性病変の描出に有用であった。その基本的手技の実際につきビデオで供覧する。

【術中超音波検査の実際】トロッカーを挿入し、肝下面に生食を注入した後、剣状突起下よりアロカ LC プローブ 7.5 MHz を挿入する。胆嚢隆起性病変の確認、肝十二指腸間膜の横断面で胆管および胆嚢管合流部、肝動脈、門脈、脾内胆管、十二指腸乳頭の描出を行う。膈下部より肝十二指腸間膜の縦断像を描出する。各部位の典型的な超音波像と、胆嚢隆起性病変、胆管結石症例につき供覧する。